

昨年5月長男を出産したこともあり、働くお母さんのケニアの子育て事情と日本のそれを比較してみたりして考えることが多くなった。

ケニアの子供の出生率は年々減少しているとはいえ3%を超える。都市部と農村部では格差がかなりあるが、やはりナイロビなどの都市部では、先進国のように女性の晩婚化・少子化の傾向は少しずつではあるが私の知る人の中にも多くなってきているように思う。

例えば、私の旦那の祖父は2人の奥さんがいて、それぞれに子供が10数人いるので、彼には子供が20名以上いることになる。しかしその次の彼の両親の世代になると、一桁で5~6人前後が多い。そして私の旦那世代になると(特に都会に移り住んだ場合)には、1~4人となる。

この傾向は、政府、国際機関やNGOが子供数を制限しようとキャンペーンした成果というよりは、それぞれの家族がベストの選択をしている結果ではないかと私は考える。もちろん今でも10人以上子供がいる家庭も沢山ある。つまり、一人一人に教育をきちんとさせられるかどうかによって子供の数を制限している家庭が増えてきた。

ナイロビなどの都市で働く女性の価値観も、先進国と変わらなくなってきている。ケニアで売られている女性誌「EVE(イブ)」は私も好きでよく読んでいたが、内容は日本で売られている女性雑誌の内容と大して変わらない。「キャリアと子育て」「仕事をしながら子供産むタイミング」いった特集があったりする。一緒に仕事をしたことのあるケニアの女性たちはスーツを着て、メイクをし、携帯電話片手にいつも忙しそ

うな感じである。彼女たちは高校や大学を卒業し、仕事に就きながら結婚・出産・子育てをしている人が多い。

そしてそれを可能にしているのが「nanny(ナニー)」と呼ばれる「お手伝いさん」の存在である。働くお母さんを持つ家庭にはほとんど「お手伝いさん」がいる。日本でお手伝いさんというと、資産家や政治家

家のお宅でしか見かけられない存在かもしれないが、ケニアでは、働くお母さんがいる家庭ではどんな職業であろうとも、ナニーがいることが珍しくない。

どういう人がナニーとして働いているのだろうか?一般的に十代半ばから後半くらいまでの女の子で、小学校や高校を中退・卒業した後、結婚するまでの仕事としているケースが多い。また親に高校や大学を負担する経済的余裕がないと学費を貯めるためにする仕事としていることもある。特徴的なのがケニアには53の部族がいるが、同じ部

族出身で血縁関係のある家庭で働くことが多い。やはり、住み込んでいるケースが多いので、親戚や知り合いの紹介のほうが安心できるし、スワヒリ語や英語よりも部族語のほうがお互い生活しやすいということもあるのだろう。

ほとんどが女の子であるがまれに男の子でも、「shamba boy(シャンバボーイ)」や「house boy(ハウスボーイ)」として雇われていることもある。シャンバとはスワヒリ語で「庭」を意味するので特に庭の世話をしていることが多い。この場合は、外国人や政治家のお金持ちの家で働いていることが多い。

ナニーの給料は、決して高くない。一ヶ月住み込みで一日中働いて日本円で1000円から3000円くらいの間であると思う。なので、一般に公務員や会



社員としての給料が1万円から2万円くらいだとしても、日本のお手伝いさんを頼むよりは遥かに経済的負担は少ない。

彼女たちは確かに若い女の子が多いが、その働きぶりはプロフェッショナルである。幼いころから家事・育児を家庭で当たり前のようにするケニアの子供たちは、小学生も高学年くらいになると、お母さんと同じように家庭の仕事を一人でこなせる。ナニーとして一日中、家にいてお母さんがやっていることのすべてを一人でやるのできるのである。買い物、掃除、選択、料理、育児、また来客がある場合にはその食事の面倒まで制限なく仕事ができるのである。

私のいた孤児院にも保育園の先生がいたが、彼女もナニーを雇い、小さな子供がいてもいつも通りに仕事をしていた。その生活ぶりは私にとって理想だった。家事が滞ることなく家はいつも美しく、子供もナニーになつき、彼女は仕事や所属している教会のボランティア活動をし、洋服の仕立てをしている旦那の店を手伝いつつ、空いた時間や夜、週末子供と過ごし、まさに自分の人生を自分でデザインしている、と感じたものだ。いつ子供を生み、いつまで休み、いつから仕事に戻るといった、日本なら、会社や保育園の都合に合わせているところを、自分の都合に合わせていけるその柔軟性と自由さ。子供にとっても地域やいろいろな人の目や手で育てられるということもあり、

小さなときから社交性を身に着けることが出来るように思う。

遠くアフリカで、女性は人生を自分でデザインしている。後進国と呼ぶにはためらうような女性のいきいきとした現実がそこにはある。先進国と呼ばれる日本で、「仕事は続けたかったけれど…」という声を沢山聞くし、やはり結婚・出産をきっかけに専業主婦として家庭に入る女性のほうが多いことも事実だ。それも女性の人生として素晴らしいことではあるけれど、大切なのは「選択肢があること」であると思う。

建前では外国人を雇用しなければ日本の産業が維持できないとか、国際化を推進するとかという日本政府ではあるけれど、本音はなるべく外国人を入国させたくない日本。国レベルで少子化が問題視されながら、産婦人科が少なくなってきたり、保育園や幼稚園も足りない地域も多くあるという。そういう施設の充実も大切だが、私の意見としては、是非プロフェッショナルなお手伝いさんを外国から雇えるような「nanny visa」を発給してもらいたい。

現実にさまざま国でナニーは仕事をして認められ外国に出稼ぎしている。いい面も悪い面もあると思うが、きちんとした雇用として家庭で是非働けるチャンスがあれば、私もナニーもそしてなにより家族全員が豊かに自分の人生をデザインしていけるのではないかと思う。